（2025.4.4）

私が考える「本気」の事前防災

矢守克也（京都大学防災研究所）

1　「ビフォー」（事前）の視点

防災・減災は、もともと、出来事に対して「ビフォー」（事前）の時間的な構えをもっている。その出来事が、(1) 実際に起きる「前」になすべきことを、(2) 起きる「前」に考えること、なのだから、防災・減災は、二重の意味で「ビフォー」（事前）だと言うこともできる。緊急の災害対応や復旧・復興についても、それらのアクション自体は出来事の「アフター」（直後や事後）に行われるかもしれないが、今のうちからそれについて考え準備しておこうという意味では、「ビフォー」に位置づけうる。

つまり、防災・減災、復旧・復興について考え実践することは、 ― わざわざ「事前」と銘打たなくても ― もともと「事前」という性格を強く帯びている。ということは、にもかかわらず、今回、「事前」と明示し、さらに「本気の」と強調しているのはなぜかについて考える必要があるということだ。そのように殊更に打ち出す必要が生じているのはなぜだろうか。それは、これまでの取り組みに「事前」になりきれていない面があるからだろう。「事前」と自信をもって称するには中途半端だったかもしれないと反省するところがあるからだろう。だからこそ、今あらためて「本気」が求められているのだと考えられる。

「本気の事前防災」とは何かについては、多様な見解があるにちがいない。多様性を尊重する考えに立って、あえて一つに集約しないという方針もあるだろう。しかし、どのような見解・立場に立つのかをそれぞれがクリアに表明して、違いを含めて共有しておくことは本検討会にとってきわめて重要だと考える。

2　結局、「後追い」（アフター）だった

時の流れとは恐ろしいもので、「ウィズコロナ」や「アフターコロナ」という言いまわし自体が、早や、すっかりアフターな空気をまとっている。でも、今こそ、私たちは、あの出来事から学んだことのあれこれを「事後」整理するのではなく、「ビフォーコロナ」で、つまりコロナの「前」に自分たちは何をやり損ねたのか、どんなしくじりをしたのかときびしく問わねばならない。

自然災害も同様である。関東大震災、阪神・淡路大震災、東日本大震災、西日本豪雨、そして能登半島地震…起きてしまった災害について、「最大の教訓はそれだ」、「これこそ継承すべし」との議論は数多い（もちろん、それも大切だ）。しかし、火災（関東）だと思っていたら建物倒壊（阪神・淡路）だった、耐震化（阪神・淡路）をセンターに据えて待ち構えていたら津波（東日本だった）、そうこうしているうちに、災害関連死が犠牲者の８割にも上っていた（熊本）など、私たちは、これまでずっと、後（アフター）に得た教訓に基づく対応の裏をかかれ続けている。このままでは、次の南トラでも、津波に用心していたら別の何かに手酷くやられて、「今度はこれだったか」とまたしても同じ轍を踏みかねない。

要するに、真に学ぶべきことは、アフターになってから指摘されている個別のあれこれではない。そうではなくて、事後になれば、多くの人がかくも容易に主張できることを、なぜ私たちはビフォーの段階で問題にできなかったのか、また対応できなかったのかである。次の破局Ｘが何か ― 南トラなのか首都直下なのか富士山なのか、はたまた、だれもまだ気づいていない文字通りのＸなのか ― はまだわからない。しかし、今この時点が、その破局Ｘに対する「ビフォーＸ」にす

でになっていることだけはたしかである。

　　というわけで、結論を述べれば、「本気の事前防災」における「本気の」の核心を、僭越ながらもし筆者が提案してよければ、ずばり、ビフォーXの覚悟をもつことだと思う。つまり、今、ビフォーX の時点で開催されているこの検討会で口にしていないことは、アフターX では決して発言しない、絶対「後追い」で論評しない、この覚悟で、防災・減災、復旧・復興（ないし、防災庁）について今語ること、これこそが「本気の事前防災」だと考える。

3　スローオンセット災害／潜在的災害

　次の破局的災害 X は、それが実際に起こる前に、　潜在的にではあるが、確実に密やかにすでに始まっている。たとえば、昨今話題の気候変動系の災害も、スローオンセット災害（じわじわ始まる災害）　として、もう何十年も前にすでに起こっていたと言える。言いかえれば、私たちは、ビフォー気候変動で何かをし損ねてしまったのだ。だからこそ、このところ毎年毎年、酷暑だ、ゲリラ豪雨だと騒ぐ羽目に陥っているわけである。「本気の事前防災」を謳うなら、気候変動系災害には、それがだれの目にも明らかになった今ではなく数十年前に本気で向きあうべきだった。同じ理屈で、次の破局的災害 X に対しては、ビフォーX であるこの今、リサーチしアクションを始めねばならない。

　そのためには知恵と手法が要る。具体的な事例を、手前味噌だが挙げておく。筆者は、ここ数年、潜在的水害（ポテンシャル水害）に関する研究を進めている。別名を「起こらなかった災害に関する研究」と言う。これまでは何ごとも起こっていないけれど、あと少しで越水・破堤しかけていた場所を、実際に越水・破堤する「前」に、計画高水位や氾濫危険水位を参照点にしながら近年の河川水位実績をもとに特定化し、そのリスクを新しいタイプのハザードマップとして可視化する研究である。

　繰り返しになるが、そうした場所では、今のところまだ何も起きていない。だから、まだだれもそこに注目していない。しかし、次（X）は、おそらくそこなのだ。なぜなら、そこでは、紙一重で破局が起こりそうなこと（「起こらなかった災害」）が近年何度も発生しているからである。実際に起きた災害について事後（アフター）になってリサーチし対策するのではなく、X になりそうなことや場所、つまり、「起こらなかった災害」について、事前（ビフォー）に予見し論じ対応する。それが、「本気の事前防災」ということである。

4　「ソフィーの選択」

　　「ソフィーの選択」という映画がある。ウィリアム・スタイロンの小説を原作にした映画で、ナチスによるホロコーストを扱っている。ソフィーはユダヤ人で、2 人の子どもがいる。あるとき、ナチの将校が彼女に 2 人の子どものうちのどちらかを選べと迫る。選ばれなかった方の子どもは、ガス室に送られる。しかも、もし彼女がどちらも選ばなかったときには、子どもは 2 人ともガス室に送られる。彼女はどうしたらよいのか？　― 考えるのもおぞましいことである。できれば考えずに済ませたいことである。実際、このエピソードを学校の授業で取り上げると提案すれば、多くの人は強く反対するだろう（6 節末尾に議論も参照）。

　しかし、これと同じことやこれに類することが、破局的な災害では残念ながら生じうるし、実際に多数生じてきた。火災が迫る自宅の下敷きになった家人から「私のことはいいから、お前は逃げろ」と言われた阪神・淡路の被災者、高台の途中まで一緒に逃げてきた老親の手を最後離さざるをえなかった東日本の避難者、医療資源が枯渇した被災地の最前線の病院でトリアージを迫

られる医療関係者…など、防災版の「ソフィーの選択」は、残念ながらいくらもある。

5　「考えるのもおぞましいこと」についてそれでも語る

　実際に起きてしまえば、それに直面し考えるほかないが、「事前」には考えるのもおぞましいこと、あるいは、口にすることすら倫理的に躊躇われること。こういった事柄が世の中にはある。それを踏まえて、ここでも結論を先に呈示すれば、筆者は「本気の事前防災」の次の柱として、上で述べた意味で「考えるのもおぞましいこと」を、それが起きてからではなく、事前の今論じることを挙げたい。トリアージなんてしないで済むならそれに越したことはない。しかし、そうせざるを得ないことが起こるのが大災害だ。あるいは、「No one left behind（だれ一人取り残さない）」や「犠牲者ゼロ」を掲げることも大切である。こうした目標を目指すことについては筆者自身100%賛成である。しかし、同時に、「Someone left behind」を甘受せざるをえない事態が生じるのが破局的災害である。よって、それに関する議論を避けるのは無責任というものであろう。
　蛇足にはなるが、上で述べた意味で「考えるのもおぞましいこと」を少し例示しておこう。あくまで例示である。昨夏（2024年夏）のような酷暑の最中に大規模で長期間のブラックアウトを伴った南トラ地震や首都直下型地震が発生し、数十万人単位で熱中症患者が発生する（ここ数年、熱中症による犠牲者は毎年1500人程度に上っている）。南トラ地震発生時に、西南日本で「有事」が生じる。コロナ禍のような感染症の蔓延時に江東五区が水没する規模で巨大台風・高潮災害が起こる。数千、数万人単位でご遺体の処置ができない状況が生じて未曾有の深刻度で保険衛生上の問題が生じる。救援人員や物資の不足等から日本社会では近年生じることがなかった規模と激しさで暴動等が発生する。そして、十数年前に実際に発生したように、地震・津波に伴って原子力発電所で事故が起きる、など。

6　「クロスロード」

　すでに、「そんな辛い話はもういい加減にしてほしい」という声が聞こえてきそうである。しかし、「本気の事前防災」は、こうした事柄を避けて通るわけにはいかない。では、どうするのか？再び手前味噌になるが、一つの選択肢を提示しておきたい。それは、筆者らが阪神・淡路大震災、東日本大震災ほかの被災地での経験・教訓をもとに作成した「クロスロード」という名の防災教育教材である。「クロスロード」は、ここでの議論に引きつけて位置づければ、「考えるのものおぞましいこと」をある程度希釈して呈示することで、社会的な議論や合意づくりを促すための防災教育教材である。
　「クロスロード」の設問の一つにこのようなものがある。背後に迫る津波の前を、あなたがいる避難場所の方へトボトボと歩いてくるおじいさんがいる。このおじいさんを助けに行くか ― YES/NO。4節で紹介した「ソフィーの選択」と本質的には同様の、しかし、若干希釈された、そして、防災・減災の場面に固有の「考えるのもおぞましいこと」の一例である。蛇足ではあるが、筆者の経験に照らすと、「この設問を使って授業をしようと思いますがどうでしょうか？」と教育現場で問うと、実は、東北の被災地の学校の方に「構いません」という反応が多い。反対に、東北以外の地方では、「いろいろな配慮からやめておきます」とリアクションをされることが多い。「考えるのもおぞましいこと」に（も）向き合う防災教育、言いかえれば、「本気の事前防災教育」を構想する上で、意味深なデータである。

7　「津波てんでんこ」

筆者に与えられたテーマは、＜防災教育・啓発を通じた地域防災力の強化について＞なので、最後に、ここまでの議論をこのテーマにもう少し引きつけて、本小論をいったん着地させておきたい。

「トリアージ」と言えば、「津波てんでんこ」である。「津波てんでんこ」とは、「自分の命を最優先に何はさておき逃げること」なのだから、見ようによっては、「自分＝優先度∞（無限大）vs. 自分以外のすべての人＝優先度 zero」という一番極端な、したがって、ある意味わかりやすいトリアージのすすめだと見ることができる。ただし、このように表現するとあまりに人倫にもとる感じがするので、防災教育や啓発の分野では、「てんばらばらに急いで早く逃げよ」、「自分の命は自分で守りましょう」など、お茶を濁した言い回しで表現している。しかし、その中核には一番強い意味でのトリアージがある。

ここで、「津波てんでんこ」が本来もっている強い意味を単に薄めて誤魔化すのではなく、この教えの核心に疑いなく存在している厳しい意味（機能）は全面的に踏まえたうえで、しかし、それだけではなく、他の複数の重要な意味（機能）が、「津波てんでんこ」という一つの教えの中に同時に込められていて、それらが併存していることに気づくこと、またそのように教えることが大切である。

具体的には、第 1 の意味（機能）は、他者のことは気にかけずに一刻も早く逃げること（本概念のルーツと言える山下文男氏の著書には「薄情なようであっても」というフレーズが付されている）、である。第 2 の意味（機能）は、第 1 の行動をとること、言いかえれば、自分が率先避難することが他者の避難行動を促進すること、である。第 3 の意味（機能）は、第 1 の行動をとることを可能にするために、自らにとって大切な人が同様の行動をとる（とることができる）よう、事前に相互信頼を醸成する必要があること（片田先生が特に強調されてきたこと）、である。そして、最後に、第 1 の行動によって生き延びた者が不幸にして命を落としてしまった者に対して抱く自責の念を低減すること。「自分は助けに行くべきだったのだろうか…いやいや、他ならぬあの人から“てんでんこ”するんだよと教わったのだから」と、生存者が自分に言い聞かせることができること、これが第 4 の意味（機能）である。

8　本気の事前防災教育 ― 命を守ることの困難（割り切れなさ）を知る

7 節と関連して死活的に大切なことは、「津波てんでんこ」は、本来、上の 4 つの意味（機能）が同時発動するような〈関係性〉のもとでのみ、たとえば、おばあちゃんが自分の孫に繰り返し言って聞かせる（孫の方から見れば、言って聞かされる）ような場合のみ、十全な形で機能する教え（防災教育）だということ、である。実際、「津波てんでんこ」のルーツである山下氏の著書に登場する「てんでんこ」は、この〈関係性〉のもとで、別言すれば、命を守ることをめぐる葛藤（割り切れなさ）とともに登場する事例ばかりである。

したがって、「津波てんでんこ」を、その前提となる〈関係性〉から引き剥がして、単純明快なメッセージとして、たとえば「防災マニュアル」や「津波防災教育ガイドブック」といった類いの文書の一項として掲載される「教訓・ルール」のようなものとして取り出してしまうと、そこから重要な要素が脱落する。たとえば、「とても置いて逃げることなんかできない」と思っている老親から「“てんでんこ”してくれよ」と告げられれば、だれしも悩みこそすれ怒りは感じないだろう。しかし他方で、赤の他人から、「津波のときは親も子もないんです、自分の命を守ることを優先してください」と指導されれば、「他人は黙っててくれ」と不愉快な気分になっても不思議はない。

「本気の事前防災教育」を構想するために必要なことは、上の意味での〈関係性〉や命を守るこ

との困難（割り切れなさ）の領域に踏み込んで教育を構想し実践することである。防災教育は、自分の命を守る実務的なノウハウの伝授ではない。そのような矮小化した扱い方をするから、「大事なのは防災教育だけでない、人権教育も環境教育も多様性教育もあって、防災教育にかける時間がないんです…」と現場で反論されると、すごすごと退散しなくてはならなくなる。

防災教育とは、命を守ることの困難を学ぶことであり、同時に、その困難にもかかわらず自分の命を守るために力を尽くしてくれる他者（家族、先生など）が多数いること、そういった〈関係性〉の中で自分も周囲の人たちも生きていることを、体感的に（小さな子どもたちなら）、あるいは、理屈として（高校生にもなれば）学ぶことである。つまり、防災教育は、自分の命を取り巻く周囲の人びとや環境についてトータルに学ぶことであり、それ自体がすでに、人権教育でも環境教育でも多様性教育でもある。

＊まとめ

以上まとめると、「本気の事前防災」の核心は、以下の 3 つである。(1) ビフォーX の覚悟をもって、つまり、今口にしていないことは、アフターX では決して発言しないとの覚悟で防災について今語ること、(2)「考えるのもおぞましいこと」について、事後つまりそれが起きてからではなく、事前の今語ることこと、そして、(3) 命を守るためのノウハウ（だけ）ではなく命を守ることの困難（割り切れなさ）を伝えること。